

## 新島八重からの6通の手紙展

展示期間 平成二五年一月八日(火)～二月八日(日)

はじめに

時は幕末、一八五三年のペリー来航によって、江戸二五〇年の太平の世は軋みを見せ始めます。幕府の開国政策に反対した攘夷運動によって治安が荒れた京都を守るため、徳川将軍家に近く、東北第二の勢力を誇った会津藩に京都守護職の任が要請されます。会津藩主・松平容保は藩士約千人を伴い上洛。元治元(一八六四)年の禁門(蛤御門)の変では、薩摩軍と共に長州軍を一掃します。

しかしその後、大政奉還によって生れた新政府による王政復古の大号令に旧幕府側の思惑ははずれ、親幕派の会津藩は慶応四(一八六八)年にはじまる戊辰戦争(鳥羽・伏見の戦い)で西軍(新政府軍)と戦います。

力に勝る新政府軍は東進し、福島県・白河口にて凄惨を極める会津戦争の火蓋が切つて落とされます。鶴ヶ城での籠城戦では、会津藩士で砲術師範・山本家の娘・八重が女性でありながら男装し、スペインサー銃と大砲を操り戦いました。この八重こそ「幕末のジャンヌ・ダルク」と呼ばれ、後に新島襄夫人となった新島八重です。

今年のNHK大河ドラマ「八重の桜」のヒロインはその新島八重。米国へ密出国し、宣教師として帰国したばかりの新島襄と出会い結婚します。十八六年間に及ぶ波乱に満ちた生涯が描かれます。

会津戦争を戦い敗れた八重は、夫・川崎尚之助とも別れ、京都府顧問に取り立てられた兄・山本覚馬の導きにより上洛。覚馬と共に八重は、襄が目指すキリスト教学校の設立に奔走し、明治八(一八七五)年京都に同志社英学校を創立。しかし明治二三(一八九〇)年、大磯にて療養中の襄は志半ばで亡くなります。襄亡き後も京都で過ごす八重は、日清・日露戦争では篤志看護婦として従軍。また茶道師範となって、茶道を女性に広げる活動も行います。襄が亡くなって四二年後の昭和七(一九八二)年六月、八重は新島旧邸で安らかに息を引き取ります。(享年八六)

当館にはその新島八重が徳富蘇峰に宛てた6通の手紙が残されています。

蘇峰は明治九年、同志社英学校に入学し、終生の師となる新島襄と出会います。師を呼び捨てにする夫人・八重を蘇峰は敵視し、鶴(ぬえ)と言いつつた逸話は有名。そんな八重と蘇峰は明治二三年、襄の臨終の場で和解し、6通の手紙はこの年から大正十二年までの三十年間に及んでいます。そして八重の手紙が蘇峰を介し、新島襄終焉の地・大磯からほど近い二宮の当館に残されたことに深い縁を感じます。

会津魂を胸に前向きに生きた八重、そしてその八重へと繋がる襄と蘇峰の師弟愛を展示の中に見ていただけましたら幸いです。

### ◇ 展示ケース 1

#### ◆ 徳富蘇峰の代表的著作『近世日本国民史』 第七十三巻『会津籠城戦』

(この中で「著者は、しばしば同人(八重)より会津籠城の物語を聞いたことを、今尚ほ記憶している。」とある。)

#### ◆ 明治23年3月の新島八重 (同志社大学提供)

(襄の死後2ヶ月後の写真。この頃蘇峰に宛て1通目の手紙を送っている)

#### ◆ 30歳の徳富蘇峰 明治25年

#### ◆ 結婚間もない頃の新島夫妻 (同志社大学提供) 明治9年頃

#### ◆ 安政二年米国人来航の絵巻(二巻)

(ペリー一行が安政2年に下田に来航した際の絵巻物)

#### ◆ 新島襄の書

「桃李不言 下自為徑」(桃李もの言わざれど 下自ら徑を為す)  
「真理似寒梅敢侵風雪開」(真理は寒梅に似たり、敢えて風雪を侵して開く)

#### ◆ 徳富蘇峰の書 「新島先生霊位」

(昭和二〇年の新島襄五十五回忌の際に記した書幅)

◆ “幕末の三舟”の書

「青山烟霞静海波 鉄舟高歩書」 山岡 鉄舟

「雨晴江水碧烟佳遠山晴 海舟」 勝 海舟

「嵩山不揺石映日自傾茶 泥舟居士書」 高橋 泥舟

◆ 江戸開城談判図（複製） 結城素明画

（芝・田町の薩摩藩邸にて、大総督参謀の西郷隆盛と勝海舟）

勝海舟 文政六〜明治三二（一八二三〜一八九九） 江戸出身

海舟は号、幕末に安房守、維新後は安芳。戊辰戦争では軍事総裁として幕府方を代表する役割を担う。将軍徳川慶喜の意を受け、官軍参謀の西郷隆盛と会見し、江戸城の平和的明渡しに成功した。この功を担った山岡鉄舟、高橋泥舟と共に「幕末の三舟」と呼ばれる。明治維新後は新政府で参議、海軍卿、枢密顧問官を歴任、幕府崩壊による混乱を最小限に抑えるべく動いた。

江戸の佐久間象山塾では、会津藩から留学していた山本覚馬（八重の兄）や吉田松陰と交流。また、徳富蘇峰は熊本から上京した際、徳富家が赤坂・氷川の勝邸内借家に住んだことから目をかけられ、海舟の人的魅力を師である新島襄に伝えた。襄はその後の大学設立運動で海舟からの助言や指導を仰ぐ。新島襄の墓碑は海舟の筆による。

◆ 勝海舟書簡（釈文） 明治三三年一月二四日付

新島師遠行之旨御知せ被遣 兼々師之思慮度に過 事業之勉勵盛大を期するに急成るは 乍不及ぶ御忠告も仕候処 不測此訃音に接 遺憾不堪候 今日行掛之大業跡々を跨締候は 不可言之御困難と万御察申中上候 諸君定て御深慮も可有之 断然百難重りに到候事と御覚悟専一と存候 小拙是迄難危之衝に当 後善之困難を覚申候儀にて 唯々一誠字不繞之心得にて扱候へ共 内外我が負担するもの意外に矛盾を生 漸く此廿余年を経過 猶如一日之思を成す而已 後善之議は甚六ヶ敷 案外之事も発候もの故 亡師之為 且諸君え老朽之一言 無腹臆申述候 御勉勵之処、

為邦家相祈候也 一月廿四日

安芳

徳富猪一郎様

金森通倫様

小崎弘道様

封筒表 徳富猪一郎様 金森通倫様 小崎弘道様

新島襄が亡くなった翌日に書かれたもの。新島の事業を継ぐには百難あるだろうが誠実に新島先生のためにやって欲しい

◇ 展示ケース 2

新島 八重 弘化二〜昭和七（一八四五〜一九三二） 会津出身

兄の覚馬が象山塾で知り合った但馬出石藩士・川崎尚之助と結婚。その三年後、八重二四歳の時に会津籠城戦を迎え、鳥羽・伏見の戦いで命を落とした弟・三郎の装束をまとい、スペンサー銃を手に戦ったことで「幕末のジャンヌ・ダルク」と呼ばれる。会津藩は新政府軍に敗れ、尚之助とも別れることに。

八重は京都府顧問となっていた覚馬を頼って母親の佐久、姪のみねと上洛。アメリカ帰りの宣教師・新島襄を紹介され、洗礼を受けて二度目の結婚。襄からは心の綺麗な「ハンサムウーマン」と評されるが、その襄が創立した同志社英学校の生徒からは「師である新島を尻に敷く悪妻」と酷評される。

新島襄亡き後も京都に住み続け、日本赤十字社の社員となり日清・日露戦時には篤志看護婦として傷病兵看護にあたる。「日本のナイチンゲール」と呼ばれた。また同じ頃、円能斎（裏千家家元）に入門、茶名「新島宗竹」を授かり女性に茶道を広めた一人に数えられる。動乱の時代を勇猛果敢に生き抜いた八重は京都・新島旧邸で逝去、葬儀は同志社葬で行われた。その八六年の生涯は波乱万丈ではあったが、決して会津魂を忘れず、八重は最後まで会津人であり続けたと言われている。

◆ 新島八重書簡（釈文）

① 明治二三年三月五日付

追々暖和に相成り申し候処、先は貴御家内様方御揃い、御機嫌よく御渡光遊され候由、珍重に存じ奉り候。扱先達てより度々御心切様に度々御書状下され実にく有難くくりかへしく拝見申し上げ奉り候とふより一書差し上げ、御礼申し上げ度と存じ居り候らへども、何分筆取る勇氣も御座なく、ついで今日迄延引に相成り、御申訳も無き次第御用捨成下され度、願ひ上げ奉り候。扱亡夫生前より死後にいたるまで、一方ならぬ御世話様に相成り、実に拙筆に尽しがたく御深情有難く御礼厚く申し上げ奉り候。とてもかえらぬ事と存じながらも、来し方行く末の事杯と思ひ、とかく不覚の泪にくれ居り申し候。此頃は庭前の梅花咲くとも香り無きが如く、うぐひす来り啼くとも其声あわれにきこえ、時事物々心をいたましむばかりに御座候。実に月日の立つは矢の如く、四十日余り相成り候らえども、今にゆめの様に思ひ居り申し候。兼て病身に御座候間、かくあらんとは覚悟は致し居り候らへども、実に人生のはか無き事、せめて今三とせも此世にながらへ置き度杯とくだらぬ事ばかり思ひ暮し居り申し候。しかしながら同志社の将来、又大学の事を存じ候らへば、決てぐつく致し居る時に御座無く候間、是より勇氣を出し亡夫の心ざしを相つぎ申し度候。私一家の事にばかりに御座候と、如何様にも致し候らへども、一類の内に色々の事ども御座候には、是には少々困り申し候。しかし此事は小事に御座候間、御休心成し下され度、広津氏もなかく御とゞまり下され候らへども、此度は御婦社に相成り、此後中は東西別々に相成り申し候らわん、存じ居り申し候。愛友と此後四・五年の中は東西別々に相成り申し候らへども世の中に同志社てふことをしらるゝ折りを、うどんげの花咲くを待つ思ひにて、氣ながく待ち申すべく候。一方を思ひ候とくらやみ、又一方を考え候とずいぶんたのしく御座候。此後万時小妹に御そへ心の程、ひとえに願ひ上げ奉り候。当方の様子は横田、広津両兄より一月二十五日後の事は、万時御聞取り下され度、願ひ上げ奉り候。末筆ながら御尊父母御家内に宜敷く願ひ上げ奉り候。延引ながら御礼旁御伺い迄早々申し上げ奉り候。

三月五日 不具 新島八重子

徳富猪一郎様

尚々、此の度御両兄に托す亡夫の書類差し上げ申候。何分宜敷く御願ひ申し上げ候。其内に公義も出東致すべく申し候らへども、小こぶりの分は尊兄ばかり御覧下され度、大乱筆御はんじ御覧下され度候也。公義はねずみの

ふんなるや、何連の所へも罷り出、困り者に御座候

封筒表（黒枠付） 民友社にて 徳富猪一郎様 横田様二托ス  
封筒裏 新島八重

新島襄亡き後、40日程しての手紙。蘇峰は何度か手紙を出していたよう、でその手紙を繰り返し拝見するも筆を取る勇氣なかつたと詫びている。行く末を案じ泪し、梅が咲いても香り無くうぐいすの声もあわれに聞こえる、せめてあと3年くらい生きて欲しかったと吐露している。同志社の大、学設立にも思いを馳せ、襄の遺志を継承する氣丈さも見せている。

② 明治二三年三月十二日付

前文御尊免、貴社御新聞に私の和歌御かけに相成候處、私の和歌は大磯の岩にくだけし、志らなみも玉と可がやく世にこそありけれ、右の通り相認め候と存候得共、ちがへ居り申候間、右申上候。しかし何れにてもよろしく候へども、鳥渡申上候まで、三月十二日 新島八重子

国民新聞社御中

封筒表（黒枠付） 東京京橋区日吉町四番地 国民新聞社御中  
封筒裏 新島八重

国民新聞に掲載された襄を偲んだ八重の和歌の文言が少し間違っている。それでもよいが、という内容の書簡

◆ 明治二三年三月十日の国民新聞記事

（新聞に掲載された新島八重の和歌は、「大磯にくだけし波も白玉と、かやく世こそうれしかりけれ」であった。）

③ 明治四四年十月十一日付

拝啓、昨今は俄に鈴氣に相成り申し候。御皆々様御壯健にて珍重に存じ奉り候。扱御尊父様九十の御めで度御よわひの御きねんとして、実に美事成る御品、私萬て御送り下され、誠に有難く戴き致し厚く御礼申し上げ候。御両親様方御丈夫にて御目出度、百年の御祝ひも其内と存ぜられ幾久しく御祝ひ申し上げ候。先ずは御礼まで、早々申し上げ候。かしく

十月十一日

八重子

徳富様

尚々皆々様に心近敷仰せにて下され度願上げ奉候 尚御かげ様にてふしんに昨今着手致し居り是文厚く御礼申し上げ候 以上

封筒表

東京市青山南町六之三十三徳富猪一郎様 親展

封筒裏

京都寺町通丸太町上ル 十月十一日 新島八重子

蘇峰の父・一敬 九〇歳卒寿の記念品を贈られた御礼の書。百年の御祝いも其内とある。

④ 大正八年三月十一日付 留岡幸助・牧野虎治と連名の葉書

今日新島奥様を訪ね御病氣のことを伝へ候所始て奥様御承知相成り驚かれ候 「留岡幸助」

帰朝以来御伺も不立御入院のこと承驚入候 御快癒祈り居候 其中に御見舞申上度 乍略儀御挨拶申上候 牧野虎治

本日御病氣の御様子承り実におどろき入申候 御大切に御養生被成候様祈申上候 新島八重

葉書あて先

東京都築地林病院 徳富猪一郎様

差出先

京都寺町丸太町新嶋邸 留岡幸助 三月十一日

蘇峰の病氣入院を知ってお見舞いの葉書。留岡幸助、牧野虎次との連名。

⑤ 大正十年十一月六日付

拝敬 朝夕は殊の外冷々敷く相成り申し候処 御皆々様方御機嫌よく御渡光遊ばされ候らわん珍重に存じ奉り候 扱此度は喜寿祝ひの為 沢山の金子御送付下され 真に有難く御かげ様にて祝も出来候事深く御礼申し上げます 十日過ぎより五六度茶事をもよおし是にて先人なみに付合ひも出来候事御両様の御恵と真に感謝致し 御礼は筆紙に尽くしがたき事に御座候御存様の通りの下手に候得共 沢山に喜寿の染筆を頼まれ認め申候 先は御伺ひ御礼まで 草々申上候 不二

十一月六日

新島八重子

徳富猪一郎様

深井英五様 御左右へ

封筒表 東京市京橋区日吉町国民新聞社にて 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 京都市寺町通り丸太町上ル 十一月六日 新島八重子

八重の喜寿祝いで沢山のお祝いをいただいた御礼。御かげ様にて5、6度茶事をもよおすことができたとある。

⑥ 大正十二年十二月二日付

当年も余日無相成りました寒気の折がら御皆々様御障りも無御座候哉御伺ひ申上げます ここ私も無事にくらし居ますから他事ながら御休心下され度 扱過日同志社に参り其折あしかが様の御咄しのうちに此度則元氏に地所御払いに相成り申候様承り只今迄御借し相成り居候外に又々私がいちごをつくり居所を 沢山に御払に相成り御様子しかと私に御相談に相成りしかば御座無く候得共 先年同志社にせんぶぎふ致たる私のせい心は地所を切り売り遊ばさる(私の存命中は)様成事は有ましくと存じ居り其時の事情は御前様、横井様、原田様がよく御存別に書付も無き故 後の次第候様は御存無く 何だかなさけ無くもはや数日にて私も八十歳と相成り余年も有るまじく今しばらく此まゝになしておいていただき度存じます が 御前様は如何思し召しか御相談申上げます 夫とも此の地所を只今御かしに相成り居り外に三十つぼ余り御払いに相成されば同志社が立ち行かざれば元より寄付致し候事故 致しかたはなく御座候らえども左様成る事も有まじく あまりなさけ無く感じ候故に申し上げ候 原田先生はすべてそのままになし置けと仰せられ候様にお伺い居ります かんきわまりおもう事が筆紙に尽せません あらあら申上げますから御すいさつの程願ひ上げます 早々 不二

大正十二年十二月廿一日

八重子

徳富猪一郎様

尊下

尚 此書状は八重がなみだながらに認めました

封筒表 東京市京橋区日吉町国民新聞社内 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 京都市寺町通丸太町上ル 十二月二十一日 新島八重子

同志社に行った折に、八重が寄付した土地を売却したいとの申し出を受けた。自分がいちごを作っていたところであり、切り売りするために寄付したのではなく、少なくとも自分の存命中はやめてもらいたいがどう思うかと相談の手紙。情けないとある。同志社はこの頃大学設立のためかなりの資金を要していた。

◆新出 新島八重自筆和歌 二首

若松のわが古郷に来てみれば

さき立ものはなみだなりけり

たらちねの御墓のあとをとふことも

今日をかぎりとなくほととぎす

この和歌は、本年一月、資料整理中の当館収蔵品より見つかりました。同志社女子大学の吉海直人教授によりますと「通常は短冊に書かれるものが、このような形で見つかるのは大変珍しい」「八重さんと蘇峰の親しい間柄を改めて感じさせる」と解説されました。この作品は、八重が最後の帰郷（会津若松・昭和五年四月末）に際して詠んだもので、『同志社同窓会学友会期報五十五』（同年十二月）にも掲載されています。もう戻れないであろう故郷や菩提寺・大龍寺での溢れ出た想いを、裏も覚馬も八重も、そして会津のこともすべてを知る徳富蘇峰に、まずは伝えたかったのだろうと推測されます。和歌と共に保管されていた封筒には、蘇峰の朱書きで「昭和五年初夏新嶋未亡人和歌」とあります。

◇展示ケース 3

山本 覚馬

文政十一〜明治二五（一八二八〜一八九二） 会津出身

会津藩砲術師範・山本家の長男。十七歳下の妹が八重。その八重に鉄砲、砲術を教える。藩命により江戸の佐久間象山塾に留学。西洋砲術を学び、そこで勝海舟や八重の夫となる川崎尚之助と交流。帰藩後、蘭学所を設け教授に。会津守護職として上洛した藩主・松平容保に随行、京都に入ると

その後亡くなるまで会津に戻ることはなかった。鳥羽・伏見の戦いで薩摩藩に捕らえられ幽閉の身となり、眼病を患って失明。そこで記した建白書「管見」が西郷隆盛や小松帯刀に高く評価され、明治二（一八六九）年、京都府顧問に就任。キリスト教義の学校設立準備を進める宣教師・新島襄に土地を提供（有償）。「同志社」は覚馬の命名とされる。襄亡き後は同志社臨時総長を務めるが、その二年後に他界。若王子山頂の同志社墓地に眠る。

◆山本覚馬書簡（釈文） 明治二十三年一月二十四日付

拜啓仕候 爾来は総て御無音に打過御海怒ヒ下候 陳ば新島襄就眠の際は一ならぬ御厚慮を蒙り奉深謝候 其后彼後任として小生を推撰せられ候得共 何分御承知の身体に付 萬端不都合勝ち乍併僅の日〇 兎も角も承諾は仕致候得共 希くは百事御遠慮なく御心添の程奉懇望右に付 小生か旧知の榎本、勝、井上、伊藤、松方、加藤弘之、西周、及び河島醇、諸氏、も不取敢将来の為依頼状て本日差出致候間 大様御承知ヒ下候 先は右得貴度候 艸々敬具

三月四日

山本覚馬

徳富猪一郎様 湯浅次郎様

封筒表 東京市京橋区日吉町民友社ニテ

徳富猪一郎様

親披

封筒裏 三月四日 京河原町三条上ル 山本 覚馬

新島襄没後に同志社臨時総長を務めた山本覚馬は、亡くなる九ヶ月前、この手紙で蘇峰に同志社の将来についての思いを語る。自分の後継者を遠慮なく見付けて欲しい、旧知の榎本〔武揚〕、勝〔海舟〕、井上〔馨〕、伊藤〔博文〕、松方〔正義〕らにもその旨書簡にて伝えたという内容。この頃の覚馬は盲目となっていたため代筆であるが、署名の後に捺印があるのがわかる。

山川 健次郎

安政元年〜昭和六（一八五四〜一九三一） 会津出身

会津藩家老・山川尚江の三男。兄に山川大蔵（浩）。藩校・日新館に学び、

一五歳で白虎隊に編入されるが、若年のため一旦除隊。開城後は新潟へ逃れた後、東京へ出て苦学した。一八歳で政府のアメリカ留学生に選ばれ、エール大学で物理学を学び学位を取得。東京大学で最初の物理学教授となり、四八歳で総長となった。その後も九州、京都の各帝大の総長を歴任。山川亡き後に刊行された『会津戊辰戦史』は旧幕府軍を東軍、新政府軍を西軍と書いた初めての本。妹の大山捨松は日本初の女子留学生で大山巖夫人である。

◆ 山川健次郎書簡（釈文） 昭和二年四月十日付

昨日の夕刊ニ於て十九士傳に御同情ある御紹介ヒ下忝存候 過般も申上候 通り十九士傳忠死の事実少しにても多くの世に傳わり候ハバ世道人心ニ 益する所口有之候間勢力ある国民新聞ニ於て賢兄の御執筆の御紹介は大なる反響有之候 半と深く欣喜する所に御坐候 不取敢御礼申上度如此ニ 御坐候 敬具

昭和二年四月十日

健次郎

徳富学兄 侍曹中

封筒表 東京市京橋区加賀町国民新聞社 徳富猪一郎殿

封筒裏 東京府北豊嶋郡西巢鴨町宇池袋百番地 山川健次郎

山川の著作『会津白虎隊十九士伝』を蘇峰が自ら『国民新聞』紙上にて取り上げてくれたことへの御礼の書。

◆ 『会津戊辰戦史』

（昭和八年刊行 白虎隊に入隊していた山川健次郎は会津藩側から見た『会津戊辰戦史』を記した）

◇ 展示ケース 4

徳富 蘆花

明治元々昭和二（一八六八〜一九二七） 熊本出身

明治・大正期の小説家。同志社中退。徳富蘇峰の五歳下の弟。明治二二年、蘇峰の経営する民友社に入り、翻訳・短編小説などを発表。明治三一年末

から『国民新聞』に連載した『不如帰』が好評を博し文名をあげた。6 自作を無断削除されたことから、民友社との関係を断つことを決意。明治三六年『黒潮』出版に際し、巻頭に兄への告別の辞を掲げ世評をよんだ。蘆花夫妻には子供がなく、一時蘇峰の六女鶴子を養女にした。蘆花が伊香保で亡くなる間際、兄・蘇峰に電報を打って呼び寄せ、「最高の兄だった」と仲直りをして臨終を迎えた。

◆ 徳富蘆花書簡（釈文） 明治四一昭和二年四月十日付

拜啓仕候 いづれ参上の折あらためて御相談申上ぐ可く候得共一先書中を以て尊慮伺置度 藪から棒は御免下され度奉願候 ツル子を養女に仕度 御割愛御出来申間敷や切望 幸に御承引下され候はゞ千慶万福に御座候季のことにはあり また当人も双親の膝下をはなれ同胞に引わかれて独田舎の叔父叔母の家に養はるゝは可愛想に候得共親になつて見たき兩人の衷情御察下され何卒御承諾の程奉希候 老少なき家は全き家にあらず而して血は終に水よりも濃く有之候 不悉

八月廿三日

健次郎 愛子

兄上様 姉上様

封筒表 赤阪青山南町六の什 徳富猪一郎様

封筒裏 府下北多摩郡千歳村 徳富健次郎

子供に恵まれなかつた蘆花が兄・蘇峰に養女を請う内容

◆ 『蘆花全集』より「黒い眼と茶色の目」

（同志社在学中、蘆花は山本覚馬の娘・久栄と恋愛するも、新島八重に咎められて別れさせられることに。これに怒つた蘆花は同志社を辞めてしまふ。この顛末を蘆花はヒット作「黒い眼と茶色の目」に記した。）

大山 巖

天保十三〜大正五（一八四二〜一九一六） 薩摩出身

明治時代の陸軍軍人（元帥）。西郷隆盛の従弟。藩校の造士館に学ぶ。文久三年薩英戦争では砲台を守り、その後藩命により江戸で砲術を学ぶ。戊辰戦争では薩軍第二番砲隊長。明治三年欧州に派遣され、普仏戦争を見学、

翌年帰国後陸軍大佐。明治一〇年の西南戦争では司令官として活躍。以後長州の山県有朋とならび陸軍に重きをなす。

明治二四年大将・枢密顧問官となる。日清戦争では第二軍司令官。その後、参謀総長となり、日露戦争には満州軍総司令官。明治四〇年公爵。大正三年から没するまで内大臣。国葬となる。軍人として最高の地位にありながら、政治的野心なく、陸軍内でも長州閥の優勢を許した。妻は会津藩家老・山川尚江の五女・咲子（大山捨松）。

#### ◆ 大山巖書簡（釈文） 明治〇年四月二〇日付

陽春ノ好時節 益々御壮栄奉恵候 陳者今回ハ結構ナル露国事情預御贈與難有奉深謝候 扱別物ハ当茶園ニ於テ摘採ノ上調製シタル支那茶ト少々ノ角砂糖ニテ品粗ニ有之候得共 御親父様御壮康ニ被為涉仕候由ニ付御差下被下様致度 呉々モ御依頼申上候 右御禮方々得貴意候  
勿々頓首 四月二十日 徳富猪一郎様

封筒表 徳富猪一郎殿  
封筒裏 大山

蘇峰から贈られた。結構なる露国事情の御礼。支那茶と角砂糖をお父様に差し上げて欲しいとある。

#### ◆ 昭和二四年発行の文化人シリーズ切手 「新島襄」

（昭和二四年の文化の日に、わが国を代表する文化的な先覚者、一八名の肖像入りの切手、「文化人切手」シリーズがスタートし、三年間にわたって発行された。）

#### ◆ 当時を描く絵葉書

- ・ 留岡幸助が創設した北海道家庭学校の絵葉書
- ・ 新島旧邸全景の絵葉書
- ・ 満州軍総司令官大山巖元帥の絵葉書
- ・ 日露戦争時の篤志看護婦の絵葉書

#### ◇ 展示ケース 5

#### 新島 襄 天保一四〜明治二三（一八四三〜一八九〇） 江戸出身

安中藩士の子。元治元（一八六四）年、密出国してアメリカに渡り、十年間滞在。アマースト大、アンドーバー神学校で学ぶ。アメリカン・ボード宣教師として帰国後の明治八年、山本覚馬と京都に同志社英学校を開校。翌明治九年、八重と結婚。熊本洋学校に学んだ生徒（熊本バンド）約三五人が入学。蘇峰もその一人であった。明治二一（一八八八）年十一月「同志社大学設立の旨意」を全国の主要な新聞・雑誌に発表。井上馨・大隈重信・渋沢栄一・岩崎弥之助らから寄付金の約束を得る。明治二三年一月二三日、大学設立の夢半ばにして大磯・百足屋（むかでや）旅館にて逝去。その臨終の枕元で遺言の口述筆記をしたのが蘇峰であった。

#### ◆ 新島襄書簡（釈文） 明治二二年一月十三日付

国民ノ友ハ向後直々神戸諏訪山ノ和楽園方へ御遺し被下候様御願候 文部ノ教策ヲ駁スルニハ 何卒吾人ノ主義ヲ明ニスル為メ欧米現今教育ノ方針又結果事実等詳細ニ御掲被成候様奉希候 当月九日付之貴書拝読仕候又同村会別書北海道千島紗那之河内敬太郎氏より之書面も一読仕 真ニ同氏ノ篤志ニハ感服仕候 小生も同氏へハ書差出其好意を謝可申心得ニ御坐候 小生被申上候其後大二御無沙汰申上候条真平御免ニテモ其誤ハ他ニあらず昨十二月二十八日頃より非常ニ咳嗽を致し為メニ此二週間斗ハ諸事注意致し此三、四日位前迄外出も見合せ候次第然し最早宜しく覚御安心可被下候 当時八原玉城氏も阪神之間ニ運動し小生ハ重モニ神戸ニテ工風致し金森八重に大坂ニテ漸々ト手広く之着手被致居候 何分該地四分五裂人氣ノ一致セサルニハ大二閉口致居候又近來ハ政事上ノ思惑意外ニ燃ヘ揚ガリ人々殆狂氣ノ体ト申ストモ苦し可らず 而して餘他事ニハ意ヲ止めざるが如し此内が又收穫の時機かとも存候決而怠不申候得共何分無人ニ而充分諸方ニ着手之不成ニハ大二閉口いたし居候 茲ニオカシキ事件去八日大坂毎日新聞ニ掲ケアリタリ被ノ柴四郎氏ノ発起ニ而京都妙心寺中ニ一ノ大法会ヲ催し戊辰ノ戦死人ノ霊ヲ慰ムルト申訳ニテ多分ノ人モ来会致セシニ在同志社会津ノ生徒ハ一人も来会セサルヲ大二遺憾ニ思ヒシヤ法外ナル虚誕ヲ吐キ会津生ヲ罵詈し何ニモ関係ノナキ小生ノ名迄も引合ヒに出し不足ダ

旧会津藩出身で大阪毎日新聞主筆の柴四朗（東海散士）が、同志社英学校に学ぶ会津出身学生が、戊辰戦争で犠牲になった旧会津藩士の法要に参加しなかったことを引き合いに、新島の運動に批判めいた記事を書いた。これに対し、新島はこの手紙で「関係のないことで自分の名を出して不満を言われた」と蘇峰に愚痴をこぼしている。

◆新島襄の名刺 蘇峰に人物を紹介する内容が書き込んである

◆新島襄からの葉書 三通

① 明治二年十一月二五日付 布教活動中の前橋からの葉書

拜啓陳者昨日御繁劇中遠路御見送り被下奉拝謝候 当地は最初の予想よりハ氣候も温ニ有之 諸兄姉の色々ナル御世話ニヨリ万事都合ヨク落付候間 御安意被下候様願上候 右安着御報告 勿々不宜 二〇今日午後ヨリストーブノ据付モ落成候間御休意〇祈候  
上州前橋神〇町関農夫雄氏方 十一月二十五日 新島襄

この後体調を崩し、蘇峰の紹介で大磯で静養することになる。

② 明治二年十二月二八日 大磯・百足屋旅館からの葉書

昨日は御繁劇中御見送り被下深ク奉拝謝候 着後至テ気分モ爽快ヲ覚候間 乍憚御休意被成下度 猶人見君ニモ宜布御鶴聲の程奉希上候 勿々不宜 十二月廿八日 大磯むかでや 新島襄

③ 明治三年一月一日付 大磯・百足屋旅館からの葉書

謹賀新年 明治廿三年一月一日 京都同志社 新島襄

◆昭和三年一月二〇日 『国民新聞』の記事

（旧会津藩主・松平容保の六男、松平恒雄の長女・節子が秩父宮殿下とご婚約。この慶事に会津人、そして八重は逆賊の汚名をそそぐことができた  
と大変喜んだ。）

ラトノ事ヲ申立ラレ候 此レニテ柴氏ノ魂情も大概相分之ヲ評スレハ英吉利ノブルドークノ一種類ニ人ニ嚙ミ付吠ヘ付人間ナリト被察候同志社生徒ヘハ前約もナク何ノ相談モナクシテ生徒ノ一人ナル松平容大子ヲ発起人トナサシ事など不都合千万ノ挙ヲ為シ居候ナカラ恥モ知ラスニ喋々有リモセ又事ヲ以テ同志社ノ生徒ヲ誹謗いたしたル事実ニ可憐 早速会津生徒ヨリ誤正間敷可申事ニ致しオキ候 イヤミ千万ナル天下ノ志士ト被存候 小生もアマリ大同団結ニハ信仰ヲオキ不申候得共万犬虚士吠フルノ類か近來諸々ニ大同団結か初マリ僧侶神主輩迄も大同団結ニ喋言スルニハ実ニ抱腹千万ノ事ニ候 且尚吾人ノ了解ニ苦シムルハ我が基督教中諍々タル人物ノ一到論ニ全く心酔シテ地方分権平民主義ノ貴重ナルニハ眼ヲ開カス不知不識中央皇權ノ教会政治ニ退却セントシ苟モ自由自治ヲ唱フル吾人ヲ指シテ狹隘偏狐頑固ナトトノ評アルニ至ルハ近來ノ解シ難キ一現象ト言ハサルベカラズ 此ノ一致論モ當時流行ノ大同団結ノ種類ニシテ到底真実ノ一致ハ成リ難キハ小生筆ノ初メヨリ主張スル処ニ候 先日ギユリク氏ノ意見書ヲ諸方ノ教会ニ分配スル事ニ相成候得共教師中會議ヲ開キ同氏ノ意見書ヲ教会に出ス事ハ全ク差止メラレタル由 自由ニトム米国人ニモ如斯挙動アリ宜ナク我教会ノ振ハサル今ノ勢ナレハ我が教会ヨリ自由平民主義ヲ皇張スル殆望ヘカラサルモノノ如シ 民友社宜シク此重且大ナル責任ヲ負ヒ賜ヘ 本日京都ヨリノ通知ニハギユリク氏意見書出版ノ事ニ付議論數日ニ互リテ同氏ノ意見書ニレールネドデイウイス兩人力銘々ノ意見ヲ添ヘテ上梓スル事ニ決シタル由 此レハ吾人ノ勝利ト御認被下候 小生此事ニ関シテハ大二骨折内部ノ周旋致申候 大阪會議中シドニギユリク氏ニ忠告し海老名ニ氣ヲ許ス勿レト勸メオキ申シ候国民ノ友前号（卅七号）第八ページニ君子豹変ノ美質ヲ有スルト御断言アルガ此レハ實ニ我カ日本人ヲ評シ尽シテ更ニ剩ス所ナキ明評ト奉存候嗚呼我カ東洋ノ男子中英ノピューリタン人ノ性質ヲ具有スルモノノ見エサルハ日本ノ大弱点ト云ハサルヲ不得 内村鑑三氏ハ新潟之学校ニ散々ニウチコワシテ又自ラモ打コワシ遂ニ退去ニ及候 伊勢之米国行ハ賛成いたしオキ候 海老名氏ハ大坂ニ至ルト直ニ変貌セシ事ハ小生も洞察致し 小生ハ本年是非トモ出京いたし度心得ニ候へ共多分医者力ヤカマシク可申ト恐居候 右ハ為責答 早々敬具



◆昭和七年六月十六日・『東京日日新聞』 蘇峰が記した記事

(この年の6月14日に逝去した八重を偲んだもの。結びの「一個の女性としても、日本女性の誇りとするに足る一人であった」に蘇峰の想いが凝縮している。)

◆新島襄宛徳富蘇峰書簡 明治二年三月二十四日

肅啓 先夜ノReactionノ結果ハ左の通りニ御坐候 勿論今回迄ハ其の影響ハ甚た少なれとも他日ノ舞台とハ必らず可相成と存居申候 兎角今回ノ盛挙ヲ地方的ノモノト誤認致候人多ク残念ニ御坐候 何卒プロウキンシアルニあらずして、ナショナルニ致度儀と存上候 而して是れ畢竟先生御精神も右ニ相違なき儀ハ存し申中居候 明治専門学校ノ名ヨリモ一層明快ニ同志社大学と致候方可然と存居申候 同志社ノ名天下ニ高し、之ヲ以て大学ニ冠スル 万人ノ満足スル所と存候 委細ハ金森氏より言上可申上候。先ハ右迄 早々頓首  
三月二十四日 徳富生 襄先生 玉案下

封筒表 西京寺町通り丸太町上ル 新島襄先生  
封筒裏 東京赤坂榎坂町 徳富猪一郎

大学名は明治専門学校よりも同志社大学の方が良い

◆新島襄の危篤電報

① 明治二三年一月二〇日 八時三〇分

「ササキシンダン センセイキトクトイヘリ」  
発信人 ソウシウヲライソ コサキ トクトミ  
受信人 ユアサジユン一

② 明治二三年一月二一日 午後二時四五分

「スコシヨイカトヲモウ」  
発信人 ヲライソニテ ユアサ トクトミ  
受信人 ミンユウシャ

③ 明治二三年一月二三日 午前八時

「イシヤクルニヲヨバヌ スグイキタユル ハガキノコトタノム」

発信人 ヲライソムカデヤ トクトミイイチロウ

◆国民新聞・明治二三年二月二日付の記事

(国民新聞創刊号の翌日、紙面で新島襄を偲ぶ記事を掲載。久保田米僊が描いた大磯・百足屋旅館での新島襄臨終の様子。)

◆国民新聞・明治二三年二月四日付の記事

(二月二七日の新島襄同志社葬の様子。自宅出棺から同志社、若王子墓地までの雨の中の葬列を描いた。)

◆新島襄の死去に対する各界著名人からの弔電(控え)

- 新島襄氏逝去ニ付電信ニ依テ追悼ノ意ヲ表セラレタルモノ左ノ如シ
  - 新島君御死去ノ由訃音ニ接シ痛惜ニ堪ヘズ 不取敢御弔儀ヲ申ス  
右北垣国道君
  - 御愁傷ニ思フ 細君へ悔之通知頼ム  
右 井上馨君
  - 新島君ノ訃ニ接ス 深く哭惜ス  
右 板垣退助君
  - 新島君死去痛口ス 不取敢御悔ヲ申シ上グ  
右大隈重信君
  - 新島君ノ逝去ヲ弔シ奉フル  
右後藤象二郎君
- 〔以下略〕

◆故新島襄先生 二十周年記念会発行の絵葉書

(明治四三年に八重出席のもと、群馬県安中で開かれた)

◆民友社と久保田米僊との「仮契約」書

仮契約  
民友社ハ久保田米仙ヲ聴シテ図画三関スル主筆トナシ、ソレ文ノ優待ヲナス可シ。  
久保田米仙ハ図画一切ノ事ヲ編輯主任者ト協議シ、其ノ真ニ任ス可シ。  
民友社ハ実俸トシテ毎月七十円ノ報酬ヲナス可シ。  
新事件三関スル画報ヲ掲クルニ付キテハ、久保田米仙ハ編輯局員ト協議ノ

上自カラ其ノ実地ヲ探驗スル事アルヲ要ス。但シ東京市外ハ民友社ヨリシテ旅費ヲ給ス可シ。市中ト雖トモ非常特別ノ場合ハ上三岡シ。久保田米仙ハ民友社外ノ新聞、雜誌、小説等、指画等三関シテ執筆セザル可シ。但シ民友社ノ承諾ヲ得クル上ハ此ノ限ニアラズ。画ハ平均毎号二箇ヲ掲ク可シ。其ノ画幅ノ大小疎密ハ一二當時ノ必要ニ恰当スルヲ期ス。併シ特別ノ場合ニ於テハ此ノ限ニアラズ。民友社ハ久保田米仙ノ外他ノ寄稿画ヲ掲載シ、若クハ西画ヲ掲載スル事アル可シ。

久保田米仙ハ明治二十三年一月十五日迄ニ東京民友社ニ乗着ス可シ。

民友社ハ一月分ノ旅費、俸給合セテ五十円ヲ給ス可シ。

此ノ契約ハ双方ノ懇談熟議ニヨルエアラザレバ解約セザルベシ。

本契約ト交換スル迄ニハ此ノ仮契約ヲ以テ効力アルモノトス。

以上条件双方承諾ノ上盤ニ後日ノ証トシテ記名調印ス。

明治二十二年十月十四日

民友社 徳富猪一郎 印

右同日調印ス

久保田米僊 印

月報酬七〇円の破格の待遇で迎えられる。入社後、最初の仕事が大磯・百足屋での裏臨終の写生となった。

◆久保田米僊 絵入り年賀状 明治三二年一月一日

参考文献

- ・『蘇峰とその時代』高野静子著 中央公論社 昭和63年
- ・『続・蘇峰とその時代』高野静子著 徳富蘇峰記念館 平成14年
- ・『コンサイス日本人名事典(第4版)』(株)三省堂 平成13年
- ・『大人名事典』平凡社 昭和28年
- ・『徳富蘇峰記念館所蔵 民友社関係資料集』 徳富蘇峰記念塩崎財団編 三一書房 昭和60年